

2024 年度春学期授業アンケート 文学部長コメント

【文学部調査結果に関するコメント】

文学部長 寺田 俊郎教授

文学部全体の平均は全学の平均と奇妙なほど一致しており、特に問題がなかったことに安堵するとともに、文学部の独自性が見えなくなるようでがっかりしもある。

各学科の平均はほぼすべての項目で 4.0 (80%) 以上であり、良好な教育効果と満足度を得られているものと認められると考える。

各学科からの報告を通覧して特に印象深いことは次の三点である。

第一に、前学期のアンケートの結果が否定的だった部分について、多くの教員がその結果を真剣に受け止め、今学期改善の努力をし、一定の成果を上げているということである。その真摯な態度には頭が下がる。

とはいえ、多くの教員がアンケートに不合理なところを見出し、批判的に捉えている。これが第二点である。特に科目の特性や授業形態に適さない質問項目に関する批判的な意見が多い。もっともなことであると思われる。

最後に、文学部各学科の教員が、それぞれの学科と各自の研究分野に誇りをもち、それぞれの矜持を保って教育に当たっているということである。そして、それぞれの学科や研究分野の専門知を学生に伝えるためには労を厭わないが、それを阻害するものに対しては毅然として抵抗する。上記第一の点、第二の点いずれも、そこから出来しているように思われる。

2024 年度春学期授業アンケート FD 委員会文学部選出委員コメント

【文学部調査結果に関するコメント】

史学科 中川 亜希教授

以前から、再三、指摘されていることであるが、受講生が多い講義科目、少人数の演習科目、あるいは語学の文法の授業など、一切を区別せず、全ての科目を同じ項目によりアンケート調査することについての疑問が大きいと感じた。大人数の講義科目に関してアクティブ・ラーニングの機会についての設問があることは、回答する学生たちをも困惑させるのではないだろうか。アンケート項目が適切ではないことは、学生が授業評価アンケートに疲弊していることに加えて、大々的に宣伝しているにも関わらず科目全般についての回答率が低くなりがちであることの原因ともなっているのではないか。回答率が低いとアンケートにならないという指摘もあったが、徒にアンケートの回数を増やすことよりも、アンケート自体の改善、そして実施方法の再考が望まれる。

それにも関わらず教員が真摯にアンケート結果を考え、困難な場合はあるものの、可能な限り、対応をし、改善していこうとしている点も文学部全体で共通して指摘されている。

そしてまた学生の理解度について、学生自身の努力の問題なのか、あるいは授業の質や難易度と関係しているのか、アンケート結果から見出すことは難しいとの指摘もあった。この点について、学生の理解度を上げることを求めるあまりに授業の質や難易度を低下させることは避けるべきという見解も見られた。

引き続き文学部全体として、適切な難易度を見極めつつ、必要なことについては改善を行い、授業の質を高めることを考えていきたい。

以上

2024 年度春学期授業アンケート 文学部学科長コメント

【哲学科】

哲学科長 鈴木 伸国 教授

学科全体の集計としてはほぼ学部平均と同じであったが、Q4(授業内の討議)では若干の高評価を得た(平均 3.8 に対し 4.2)。逆に Q5(卒業後への応用)では若干の低評価を得た(平均 4.2 に対し 4.0)。相対的なものではあるが、ともに哲学の学問的趣旨と照応する評価である。

各教員個別の見解は倫理、哲学思想、哲学史など各学問分野の本来の性質に対応しているように見受けられた。形而上学、中世哲学など、現代とは時代的・思想的な隔りがある学野では、学生の理解を援助することへの苦勞が語られていた。また倫理関連の学野については、学生の主体的学習態度の涵養、現代的なひっ迫的問題への関心の涵養への苦勞が透かし見えた。

その他、役職者の時間割上の問題が回顧されていたが、これは致し方ない。一名、白紙解答があった。

【史学科】

史学科長 坂野 正則 教授

まず、2024年度春学期の史学科開講授業についての全体的な振り返りとしては、シラバスに沿った授業計画といったところでうまくいっていないところは改善していきたいというものがあつた。また教員の中から振り返りとして多く出た意見として、史学科開講科目について申し上げると、概説のような100名単位の大規模な授業と、各種演習のような15名以下を対象とするような授業では、学生へのアクティブ・ラーニングが異なつた対応が必要なのではないかという点であつた。特に、前者のタイプの授業について、その工夫に苦勞が見られた。また、アンケートの設問についても、両者を区別したうえで回答できるような工夫が必要なのではないか、という問いかけが寄せられた。ぜひ、検討していただければ幸いである。

つぎに、今後の授業へのインタビュー回答の反映の仕方についてであるが、大規模授業についても、グループ・ワークやFormを使った意見回収などで、なるべく双方向性を担保したいという意見が多かつた。また授業時間外の課題への取り組みについても、重要であるため、適切な参考文献の指定や、その文献を通じた「論じ方」の学習方法が学生にうまく伝わるように工夫したいという意見が出た。さらに、各種の演習と卒業論文とをいかに有機的に結び付けるかについても、授業内の議論などの進め方を工夫したいということであつた。あわせて、進路の将来設計の中で、本学科の学びをいかに活かしていくかも具体的な方法を検討していきたいという声もあがつた。

2027年度のカリキュラムの改変と単位の実質化へ向けて、史学科も具体的な取り組みを加速していきたいと思う。

以上

【国文学科】

国文学科長 福井 辰彦 教授

いずれの教員、授業においても特段問題となるような結果は見られない。

むしろそれなりの満足度と教育効果を得られているものと判断される。

「授業が難しい」との声もあるようだが、大学は高度に専門的な知識・技能を身につける場であり、その水準を下げることは、教育・研究機関としての大学の死を意味する。学生は、これまで知らなかったことを知り、読めなかったものを読めるようになるため学習しているのだから、むしろ「難しい」のが当たり前であり、それに果敢に取り組むことが大学生に求められる最低限の態度であろう。むやみに「わかりやすさ」を求め、授業の水準と質を低下させるようなことは、断固として採らないところである。

所謂アクティブラーニングについても、授業それぞれの形態がある以上、それにより得点差が出るのは自明である。この間、嫌というほど繰り返しこのことを訴えているのに、未だに十年一日に如く質問内容を変えない担当者は、理解力・対応能力を欠いているのであろうか。強く危惧を抱くものである。

このようにアンケートのあり方そのものに大きな疑問があるにも関わらず、各教員はそれぞれの授業レベルで、学生に声に真摯に向き合い、対応を検討・実施している。

カリキュラムに関わるレベルでの問題意識も見られたが、定年退職等により、教員構成も変わりつつある中、検討を開始すべき課題であると考えます。

その際も、軽佻浮薄な世論に惑わされることなく、長い伝統の中で培われてきた本学科の学問の体系やそれに基づく教育方法を堅実に守ってゆくことを大前提に、真に現在必要な修正・調整を加えて行くこととしたい。

【英文学科】

英文学科長 松本 朗 教授

英文学科の授業評価は、大学全体の平均値とほぼ同じであり、各項目について 80%程度が肯定的な評価をしているところを見ると、学生は学科の科目の授業内容に比較的満足しているように見える。ただし、予習・復習にかけた時間を問う項目で、シラバス通りの 190 分に相当する「2 時間以上」と答えた学生が 25%程度で、「90 分～120 分」と答えた学生が 40%、あとはそれ以下であることをを見ると、単位の実質化にはいま一步届いていないと言えるかもしれない。

学科の各教員のコメントを見ると、前回の授業評価でやや否定的なコメントを受けた点について、それぞれが秋学期からすぐに修正を試みているようで、そうした過程を繰り返すことで自身の授業（評価）の改善をつねに図っているようであることがよくわかる。「否定的コメント」といっても、授業内容に関する重要なものもあれば、リアクションペーパーに評点をつけるだけでなくもっとフィードバックがほしい（双方向のコミュニケーションがほしい）といった、教員にとってはそれなりに時間をとられるものもあり、大人数の科目でそうした要望に対応するのは難しい場合があることも事実である。

英文学科の 2024 年度春学期の非常勤講師の先生の科目では、(1) 4 月に「問題発言が多く見られる」と学生から学事センターに通報があった科目、(2) 教員がなんらかの疾患により、学生とのコミュニケーションがうまくとれず授業になっていないとか、60 分の学期末テストで 58 分しか時間をとらなかつたとか、学生から学事センターや学科長に連絡があった科目があった。(1)については、すぐに当該の先生に注意をお願いし、改善が見られ、(2)については、当該の先生に問題の指摘はできなかつたが、授業内でマイクを使っただけをお願いする、などしていた。(1)の授業評価には否定的なコメントもあるものの内容については肯定的なものもあり、授業内容としては許容レベルであったことが推測できる。(2)の科目の授業評価には、やはりかなり否定的なコメントが多く、科目で目指されている学びも、質・量の面で標準的レベルには達していなかつたようであり、学期末に通報がなかつたのが不思議なくらいである。履修登録をしていた学生たちに心から申し訳なく思う。(2)の先生は 2025 年度は授業を担当されないので、その点だけは対応できてよかつたと考えている。

【ドイツ文学科】

ドイツ文学科長 中井 真之 教授

各教員がアンケート結果を踏まえて、担当科目の評価を行い、必要に応じて今後の対応策を考えていることを確認できました。

昨年も同じことを述べましたが、Q4の「アクティブラーニング」の有無に関する問いですが、科目の内容や性格（ドイツ語の文法の授業、ドイツ文学史の基礎的知識の修得を目指す科目など）、受講者のあり様（ドイツ語のレベルに差がある）によっては、アクティブラーニングを導入するのが難しいように思いました。

Q5については学科のカリキュラムにおける各科目の位置づけをガイダンス等を通してさらに説明する機会を設けたいと思います。

アンケートへの回答者が少なかった科目もあったようですので、事前の周知を徹底し、アンケートへの協力を呼び掛けたいと思います。

【フランス文学科】

フランス文学科長 博多 かおる 教授

基礎語学の授業については熱心に取り組んだと思われる学生から授業に対するポジティブなコメントも多く、学生の努力と授業の充実度が連関していることがわかる。2年次以降はより成績を気にする学生が多く、教員による評価基準について疑念を呈する例もあったようだが、フランス文学科では合議により成績を出しており、この点について問題はない。

抽象的な概念を扱うより専門的な授業においては、学生の習得度の差が開くのと比例して授業に対する満足度もばらつくようになる。学生自身が理解できなかったという事実と、本人の努力/授業の質の関連性を解き明かすことは、授業評価からは難しい。

グループワークやディスカッションの機会が増えていることを評価する学生が多い一方、その機会をさらに増やすことを求める学生もおり、工夫を重ねていきたい。

授業評価の結果を受けて、授業運営の難しさを訴える教員コメントもあった。その理由の一つは、少人数クラスも十分に少人数ではないということであった。現在以上に少人数のクラスを設けることは難しいため、授業運営上の工夫が必要だと考える。

学生は授業評価の多さに疲労感であり、授業内で時間をとってでも解答してくれない学生もいる。回答率を上げていかなければ真のアンケートにはならないことから、授業評価の実施方法にもなんらかの改善が必要だと考える。

【新聞学科】

新聞学科長 阿部 るり 教授

新聞学科の学科全体に対する評価は、Q1 から Q13 までの全ての項目において、全体平均値と同一あるいは、上回る結果となった。授業に対する満足度を問う Q12 についても「とてもよくあてはまる」61.2%、「ややあてはまる」28.2%を合計すると、約9割に達しており、学科全体としては、概ね良好な結果と言える。以下、個々の教員から寄せられた（1）好評だった点、工夫を行った点（2）今後の課題について記載する。

（1）好評だった点、工夫を行った点

- *前回の授業アンケート結果を踏まえ、フィードバックの機会を積極的に設けたこと。
- *時事的な話題、ニュースと結びついた授業内容に対しては高い評価が得られた。
- *40名以下の小規模な授業の満足度が特に高かった。
- *ウェブ掲示板を併用したディスカッションの実践。

（2）課題と改善策

学科教員は、授業、演習を行っていく上で、何が今後の課題であるのかを明確に認識しており、対応策についても具体的に検討している。以下の点については、学科教員間で共有し、学科の授業改善にも役立てていきたい。

- *大規模授業でのアクティブラーニングの導入
- *グループワークを行った際、個々の学生の貢献度、準備状況を反映して成績評価を行うこと。
- *予習ができる仕組みや授業外で取り組む課題等によって、学生が主体的に学ぶ体制を整えること。
- *教員側の「前提」を前提とせず、学生のニーズや理解状況に応じて丁寧に対応していくこと。

（3）その他：アンケート質問項目の改善

質問項目において「アクティブラーニング」の例としてあげられている例が、やや限定的で、学生が狭義に解釈しているのではないかとの指摘があり、改善の余地があると思われる。

以上

【文学部横断型プログラム】

文学部長 寺田 俊郎教授

文学部横断型人文学プログラム全体の平均値は、第1問から第10問までのすべての項目で、全学の平均に一致し、一部の項目ではそれを上回り、ほとんどの項目で4.0を上回っている。全体としては良好な成果を上げたと認められる。

各科目に目を転じて、ほぼすべての科目で文学部の平均に一致するかそれを上回っており、各科目も良好な成果を上げたと認められる。

ただ、アクティブ・ラーニングの項目は総じて他項目より評点が低く、課題が残る。多人数の授業の場合つねに難しい課題であり、科目の性質によっては実施に適さない場合もあるが、横断型プログラムそのものが学生の主体的な参加を重視するものであるから、工夫をして課題を果たしたい。

基礎科目「テキストを読む」の自由記述では、学生が関心と意欲を掻き立てられ、多様な視点からテキストを読むことを楽しみ、文学部らしい学びを経験したことが窺われ、横断型プログラムの存在意義が感じられる。たいへん喜ばしい。

所属学科 哲学科

氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

どの科目も授業の趣旨が理解され、学びやすい環境を提供できていたようで、安堵している。

演習科目で、発言者が固定化するので、指名制などを取り入れてほしいという意見があった。これは悩ましいところである。やはり、学生が主体性をもって意見や質問を述べる権利を行使してこそ、真の「演習」の学びが実現されるからである。

必修科目が五時限に当てられたのは学生に対して申し訳ないことだったが、しかし、担当者の校務や、教室の逼迫状況などから、やむを得ない面があった。

2. 今後の具体的対応策など

特になし。

所属学科 _____ 哲学科 _____
氏名 _____ 教員② _____

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

コメントなし

2. 今後の具体的対応策など

所属学科 哲学科

氏名 教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

幾つかの担当科目に関しては、〈説明のわかりやすさ〉という点が基本的な課題であることがアンケートの結果で際立っている。哲学は本源的にわかりやすいものとは決してなり得ず、今日の情報文化や映像表象に慣れ親しむことから理解の幅や思考のダイナミックな発展が立て塞がれている若い新世代に、〈哲学的に思索すること〉への道案内を開き習熟への一步一步を共にすることは困難を極めるが、ていねいに解き明かす努力と授業の内容に受講学生が肉迫できるよう、教員はその臨み方においてさらに邁進することが求められる。2つの科目は、シラバスに沿って実施されたかという点と、シラバスに設定された到達目標が身についたかという反省点について疑問とされる結果が呈示されたが、授業の進行は受講学生たちの反応を総合的に診断して一定の軌道修正を限定的にでも行わざるを得ない場合があり、また到達目標はそのレベルにおいてかなり高く設定されているので、これらの科目において教員の側からは相応しい十全な成果があったと判断できる。全般的にアクティブラーニングの取り入れは十分であったと云える。

2. 今後の具体的対応策など

簡単な具体的対応としては、(全学共通科目については平常の授業からして活用している) Moodle に授業資料等を呈示することを学科の専門諸科目についても行うことが学生の理解の進展と便宜に資することになる、と考え直せる(すべての授業をプリント印刷された紙媒体を配布して実施する姿勢を貫いているので、これは哲学的思考の訓練と発展のために必要不可欠ではあるものの、同時に Moodle に呈示することを試みる)。また、リアクションペーパーの活用の在り方も、さらに具体的に検討する。

所属学科 哲学科
氏名 教員④

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

倫理関連で、感情の要素を扱ったテキストへの反響が大きかった。
同時に、テキスト解説時に（学生がテキストの文脈を理解しにくかった状況において）、講師の解説が不適當であった旨の指摘があった。（社会的言説についての言及が講師の主観的意見の表明として受け取られたようだ。指摘者1名。高評価の学生もあった。）
二年生の英語のテキストで、学生の読解力とテキスト難易度のミスマッチが指摘された(テキストが難解すぎたとの評あり)。

2. 今後の具体的対応策など

解説時には受講者の理解度にあった釈義を試みねばならない。
文献講読においては選択されたテキストの内容及び理解度によって、評価が決まる傾向が見られた。今後も一層、良テキストの選定に心掛けたい。

所属学科 文学部哲学科

氏名 教員⑤

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

私の担当科目については、いずれもカトリックに基づく本学が求める知の在り方を模索しながら、シラバスを造り、提示している。シラバスにそった進行である点は、学生から一定の評価を得ている。

一方で、キリスト教さらにはカトリックが本邦で知られていないことから——一方で、大学院レベルの教養の準備のためには、これは必須の知識である——アンケート対象（ラテン語 IA と中世哲学史）のうちの一つ、中世哲学史においては講義内容自体が学生にとって難解なものとなっていることは、如何ともしがたい。

中世哲学史において平均を下回る設問は 3 および 4 だが、学科科目のなかでの本科目の位置づけ、14 回×100 分という限られた時間のなかで、3 と 4 を満たすことには限界がある。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目（HPH22500）中世哲学史に関しては、授業時間内の 2 分ほどの小休止については、実施可能と考える。それにより、学生の集中力が増せばよいであろう。

また、Q.13 で 1 および 2 の評価を付けた学生のコメント（クレーム）については、率直に理解しがたい。学生を前の席に着座させることとすることで、授業中の学生の出入りは自然やむと考える。遅刻することは好ましくはないが欠席することよりも良いということがクレームを書いた学生にはわからないのであろうか？ 中途退席者を注意するにしても、授業の流れが滞ること、授業全体の雰囲気が悪化することについて同人は考えないのであろうか？ 私語であれば即注意するが——私の担当授業で私語はない——、いない人間への注意など、できないのである。

「学生の能動性を前提とした授業」の実施も期待されているが、「傾聴」が能動性の基盤であることに学生は気づくべきであり、アクティブ・ラーニングを本学が標榜するにあたって、その基盤が「傾聴」にあることをおろそかにしてはならないであろう。個人としては、この点を常に学生に伝えつつ、授業を展開するつもりである。

所属学科 文学部国文学科

氏名 教員 ⑥

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

各種コメントは回答で、特に付加するコメントはなし。
質問項目が多すぎた) 不適当と思われるものも
あり、お詫言

2. 今後の具体的対応策など

所属学科 文学部史学科

氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義科目と演習科目、それぞれにつき、概ね想定通りの反応だった。

2. 今後の具体的対応策など

Q11「この授業を受けて知的に刺激され、深く勉強したくなった」は高評価であるにもかかわらず、Q12「この授業1回に対して授業時間外に費やしたすべての時間は、どれくらいですか」が低く出ているので、さらなる課外学習の必要性について考えたい。

所属学科 史学科

氏名 教員②

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ① 演習は受講者数が少ない上にアンケートに答えた学生も少ないため、有効な結果になっているのか疑問に思った。
- ② 概説の授業については、平均値を大きく下回っている項目が2つ（Q4. 学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブ・ラーニングの機会があった、Q5. 学習した内容が在学中もしくは卒業後にどのように応用されるかを学ぶ機会があった）見られたため、対応策を考えたい。
- ③ 概説の授業にいた態度の悪い学生（大幅に遅刻してきた挙げ句、注意をしてもおしゃべりを続ける）について、「授業妨害」と受け止めたり、「出禁にして欲しい」と書く学生がいることは、やや気になった。

2. 今後の具体的対応策など

- ① 履修者15名以下の演習科目では、アンケートをしてもあまり有効な結果が得られないことから、アンケートの対象から外せるなら外す。
- ② 科目の性質上、また受講生数が多いことから、プレゼンテーションなどは導入しにくいですが、学生同士で議論をさせる時間は設ける試みはしてみたい。また、学習内容の在学中・卒業後の意味についても、必要に応じて強調してみようと思う。
- ③ 私語については、周囲の学生への迷惑も考慮し、その都度、口頭で注意を繰り返したが、こちらが気にならない程度の私語であれば、注意し続けるわけにもいかず、また出禁にするわけにもいかず、効果的かつ具体的対応策は思いつかない…。この手の態度の悪い学生が増えないことを願いたい。

所属学科	史学科
氏名	教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

シラバスの計画通りに授業が進んでいなかった部分が見られたことや、グループ発表の事前告知や授業時間の配分について、もう少し工夫の余地があった。

2. 今後の具体的対応策など

シラバスと実際の授業の進め方の対応に気を配り、学生から指摘のあった、授業時間の配分やグループ発表について改善したいと思う。

所属学科 史学科

氏名 教員④

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全般的には授業の評価は高かったが、大人数講義での設問4、すなわち、アクティブ・ラーニングの機会の有無を問う設問だけが、学部科目の平均より下回っていた。授業それぞれの特性や目的を考慮せず、一律にアクティブ・ラーニング導入の有無を問うことには大いに疑問を感じる。アクティブ・ラーニングがより効果を発揮し、それが重要な位置を占めている授業と、そうではない授業では設問を変える必要があるのではないか。ちなみに、少人数の演習授業の場合は、同じ設問での評価が高くなっている。授業の良しあしの問題ではなく、授業の性格やねらいの違いであろう。

2. 今後の具体的対応策など

上記をふまれば、大人数授業に何らかのアクティブ・ラーニング的な要素をどのように取り入れていくかということが今後の課題となる。とはいえ、そのことが多様なねらいや位置づけをもった個々の授業にとって、おしなべて「改善」といえるのか、試行錯誤をしながら、ゆっくり考えていきたい。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員⑤

2024 年度春学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

FD アンケートへの回答を、ありがとうございます。

回答結果の全般的な傾向は、授業を行っている時に感じていた手応えと一致しており、こちらの熱意や工夫が伝わったようで嬉しく思います。

ただし、履修者の自己評価の欄には低いポイントが散見されました。こちらとしても、学生がそのポテンシャルにふさわしいアカデミック・パフォーマンスを発揮できていないのではないかと危惧していたところでした。これは教員や一授業でどうにかなる問題ではありませんが、可能な限りエンカレッジメントに努めたいと思います。

2. 今後の具体的対応策など

総合的に評価した上で、授業の方針や基本的な制度設計を改善あるいは踏襲して行きたいと思います。

ブラッシュアップの具体例としては、レジュメや課題等の教材の改善に努めたいと思います。特に Moodle を使用した課題については、より多様で効果的な課題の作成に取り組みたいと思っています。

ただし、上智大学の Moodle は仕様上、不便な点、使いづらい点が多々あります。FD 委員会が情報システム室と密な連携を取りつつ、使い勝手を改善していただければ嬉しいです。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員⑥

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

ゼミおよびプレゼミについては、少人数教育でもあり、また学生と教員との距離が近いので、例によって回答が正確な状況を反映しているか疑わしい。毎年の変動も少ないため、こちらで自覚的に改善を図ってゆくしかない。

問題は「アジア・日本史系概説Ⅰ」だが、今学期は昨年度の反省から学生間で意見交換する機会を設け、それを授業時間中での口頭発表や、リアクション・ペーパーでの回答に反映してもらった。よって関連する項目の数値は上がったが、その時間を設けるために授業の内容を一部削減したためか、学生にとっては難解であったようで、全体の数値が低下してしまったような印象がある。可能な限り個別具体性を重視して情報量の多い講義を心がけてきたが、近年の学生の要求とは乖離しているところもあるのかもしれない(回答数が少ないので、全体の傾向が反映されているかどうかは分からない)。

2. 今後の具体的対応策など

ゼミやプレゼミについては、この数年、学生および学生生活の多様化にともない、課題を軽くしてきた経緯がある。昨年度は「単位実質化」分科会に参加しこの問題も話しあったが、やはり現状のカリキュラムでこれ以上のタスクを課すのは難しい。しかし一方で、現状では卒業論文を執筆するスキルが十分に成長しない。この秋学期には、具体的に「論を作る」方法等について実例を示し、意見交換するワークショップを行ったが、多少は効果があったようで、来年度からはさらに注意して盛り込むようにしたい。

概説については、来年度からはもう少し全体の分量をライトにし、流れを説明するにとどめ、最新の学説など重要事項に絞って詳しい解説を施すよう、抜本的な再構成を進めたい。場合によっては、単にこちらの問いについてグループで考える時間を設けるだけでなく、史資料を読解し、そこから何が分かるか話しあってもらおうなど、ゼミ的な要素を交えてゆく必要もあるのかもしれない。それらの試みを通じて、歴史学や古代史の魅力を味わってもらえるようにしたい。

所属学科 史学科
氏名 教員⑦

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

昨年度、大人数講義において、学生同士で意見交換する場が欲しいという学生意からの意見があり、それをうけて今年度授業において講義内で意見交換の時間を導入した。

また、授業時間を使い四ッ谷周辺へのフィールドワークを実施した。このような新たな試みに対して、学生から「よかった」という回答が得られた点は、アンケート実施・改善を経た手応えを感じることができる。

2. 今後の具体的対応策など

アンケート回答率が低い点について、授業内に書き込む時間を、設けるなど工夫が必要だと感じた。

また、授業準備、事後学習の時間が少ない点について、次回授業時に振り返りテストを行ったり、学生間の討論準備のために、事前準備時間を課すなどの新たな取り組みが必要である。

* * * * *

所属学科 史学科

氏名 教員⑧

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

こちらの熱意が伝わっているようで、その点は、率直にうれしい。
ただ、改善すべき点もあり、引き続き教材や授業方法の改善につとめたいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目におけるアクティブラーニングが不足しているようなので、講義科目の授業の一部を双方向型にできないか、検討したい。

所属学科 国文学科

氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

①一年生の必修の授業を、内容も扱い方も難しめに計画したところ、他の授業に比べて格段に評価が低かった。わかりやすいが虚しさもある。

②「なんか先生の言ったことに声を上げて笑う女がムカつきました。芸人にガチ恋してる女みたいで良かったです。でもそんな女のキツさを享受する場なんてそうそうないですからね私はこの授業受けてよかったなと思います」というコメントがあった。こちらとしては声をあげて笑ってくれるとありがたいのだが困ったもの。

③授業中にグループ・ワークや当てて発言させるといった取組は一切していないが、「事前課題やリアクション・ペーパーを通じてのあれこれ、またそれやこれやも立派なアクティブ・ラーニングなのである」と周知徹底したところ、点数が高くついていた。

2. 今後の具体的対応策など

①これにめげず、一年生の必修のみならずどの授業でも、どんどん難しい話をして、それにトライしてもらおうと思う。

②声を上げて笑ってくれると助かると、周知徹底していこうと思う。

③引き続き周知徹底を心がけていきたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員②

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

丁度アンケート実施の時期に covid19 に感染してしまい、十分な回答を得られなかった。

そもそも今学期は心身ともに不調が続いたため、私自身にとっても不本意な授業が多くなった。学生諸君にも不満・批判のあるところかと思う。お詫び申し上げたい。

2. 今後の具体的対応策など

心身の不調が外部的な要因によるものが多いものだったので、対応・対策と言われても困る部分はあるが、いずれにせよ体調管理には留意したい。

自由記述には、こちらの意図・目標と合致するようなコメントも見られたので、授業の形態などについては大きな問題はないものとする。

所属学科 国文学科

氏名 教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

毎度毎度の授業において反省を繰り返しており、アンケートを受けて特別に考えることはない。学科はカリキュラム編成について、改革を繰り返して長い時間をかけて構築してきた。その中で様々なタイプの授業を設定しているのであり、それを一色単に数値化して比較をされても、コメントのしようがない。

2. 今後の具体的対応策など

「古典文学基礎」「古典文学概説」「古典文学講読」については、今後、担当者も変更となっていくこともあり、授業内容の棲み分けと整理が必要だと感じる。学科内で検討していきたい。

「特講」と「演習」については、半期での成果を追求するよりも、長い目で見て研究の土台となるものであることを、今一度自覚をして臨みたい。

所属学科 国文学科
氏名 教員④

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

演習科目については、評価が高かったが、講義科目に関しては評価が低かった。演習科目は、学生の発表を受けての指導なので、学生の資質・学力を踏まえて行うことができるが、講義科目は、新入生のほぼ全員が履修しており、学生の資質・学力を判断できないので、それを踏まえて指導することができなかつたためであると推測される。

Q 4 は講義科目に必要なのか、疑問を感じた。一年次の選択必修科目については、新入生一人一人を把握するために、全員一度は発表する機会を設けたが、六〇人を超える講義科目では学生同士で議論を行うことは不可能であり、Q 4 は無意味であると感じる。

2. 今後の具体的対応策など

自由記述で、基礎科目について難解であったとの感想が目についたが、年々低下する新入生の学力に対応した授業を行うように心がけたい。また、やる気の無い学生にいかに関機づけをするかを考慮しながら講義することを心がけたい。

講義科目に於いても、生の理解度を確認するために、可能な限り、小テストやリアクションペーパーを多用しなければならない必要性を感じた。

所属学科 文学部国文学科

氏名 教員⑤

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体的には、学部平均とほぼ同レベルの数値であったが、前回と同様に、質問 4（プレゼンテーションやアクティブ・ラーニングの機会）の評価は低めに出た。

ただし、演習では、学部科目の平均より高い値となっているので、授業のタイプによる相違と考える。学部の必修科目の場合は、知識を伝達する必要があるため、どうしても双方向の活動が抑制される。

授業内容については、リアクションペーパーへのフィードバックが一定の評価を得ているようなので、今後も続けたい。

また西周を取り上げた特講については、一般的な西周像とは異なる言語学者としての側面を取り上げたが、興味を持つ学生もいたようでうれしい。

なお、他学科の学生から難易度に関する率直な意見が出たが、やはり国文学科の既習事項を前提として授業を進めるのはやむを得ない。工夫はするが、この点については、了解してもらえないと考える。

2. 今後の具体的対応策など

リアクションペーパーに関するフィードバックは、今後も続ける。

また、概説的な授業においても、意識的に問いかけを行い、双方向性を少しでも保てるよう、配慮をしたいと思う。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑥

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義内容の性格上、どうしても受講者同士で話し合ったり、プレゼンテーションを行ったりする機会を持つ事ができず、今回のアンケートでも Q4 の数値が低いという結果であった。今後の課題として、継続して考えてゆきたい。

2. 今後の具体的対応策など

自由記述に、シラバスを変更したため取り上げることができなかった作品を読みたかったという意見があった。シラバスに忠実に講義が進められるように努めたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑦

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

概ね、こちらが意図した授業は行えているように感じられた。
授業の最終週に感染症にかかって休講にしたため、アンケートの回答率が低くなってしまった。

2. 今後の具体的対応策など

例年、私の授業を最後まで聞いた上でアンケートに答えてもらうため、最終週に重点的にアンケートを実施していたが、今回のように休講にせざるをえないことがあることを鑑み、もう少し早めに呼びかけを行うこととしたい。

所属学科 英文学科
氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

Thank you very much for conducting the survey and supplying the results.
I found the whole set-up to be very user friendly, especially the changes in the Loyola display. The results I got were very encouraging and make me feel I am not doing too many things wrong! Of course, not all the students choose to respond, and this does make the results a little difficult to trust, but it seems reasonably consistent with other years. My main worry about questionnaires like this is that students' aims for any given class, and teachers' aims for the class cannot be expected to be the same, and also that students cannot always be expected to understand why teachers do whatever they do (sometimes the reasons are based in knowledge that the students do not have and which cannot be taught in that particular class). But bearing this in mind, I do find the questionnaire reasonably useful feedback.

2. 今後の具体的対応策など

I cannot really see any practical ways to improve things. Making the questionnaire compulsory would get more data, but might create a negative response from students. I suspect that we are doing things as well as in currently practical.

所属学科 English Literature

氏名 教員②

2024 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

Thank you for sharing the comments from my students. The feedback I received has reinforced my dedication to constantly improving my teaching methods. It's clear that the way I teach and the materials I use directly impact how much students are engaged and understand the material. As a result, I plan to implement these suggestions to create a more stimulating and effective learning environment.

2. 今後の具体的対応策など

In response to the feedback, I have found several areas I would like to address as mentioned by the students.

The feedback I received about assignment instructions has made me realize that I need to provide more specific guidelines and step-by-step instructions for all assignments. I also plan to create rubrics that clearly explain what is expected of students and how their work will be evaluated. This will help students understand what is required of them and how they can achieve their best possible results. I am currently using Moodle to create a transparent gradebook that will allow students to track their progress throughout the course. This is an ongoing process, and I will continue to refine my approach based on feedback and student needs.

所属学科 英文
氏名 教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- (1) 演習は 10 人強という少人数クラスのため学生個々人とのやりとりも密になり、また学生が抽選で選んだクラスであるため、扱うテキストに対する彼らの興味も最初から高く、教員と学生双方の授業に対する積極性が比例しているように思われた。
- (2) 一方、History of English Literature & Culture については、大教室のクラスであること、イギリス・コース選択者の必須科目であること、基本的に暗記科目であることが主たる要因で、学生の興味の示し方に大きく差が出る科目であることを実感した。
- (3) スキル・クラスに関しては、1 年次生対象の Reading & Research は週 2 回開講、小規模クラス (20 人程度) で、例年比較的教えやすい授業であるが、今年度春学期の学生はこれまでになく学習意欲が低く、受験に向けた学習方法 (辞書をひかずに読み進める) から抜け出せず、手を焼いた。学生の回答を見ても、授業外の学習時間が低いと回答した学生の率が極めて高かったのは、残念ながら納得の結果であった。

2. 今後の具体的対応策など

- (1) History の授業については、提出課題に記されていた疑問点への解答を授業開始直後に簡単におこなっているが、疑問が提示されていない場合でも、課題の作成方法などについてのフィードバックにもう少し時間をかけるように心掛けたい。
- (2) 同じく History の授業に関して、暗記すべき文学史の事項が大量にあることは否めないが、ここ数年、授業でカバーする内容を精査し、ノートを大幅に作り替えた成果があり、今年度の学期末試験ではかなり平均点が上がってきたので、来年も様子を見て、引き続きノートの整備に努めたい。
- (3) マイクの使い方の拙さ (声がのりにくい等)、語尾の聞き取りにくさ、早口といった問題点を指摘する意見がいくつか目についた。話し方について意識的に改善を試みたい。
- (4) 課題が多すぎるという意見が若干数見られたが、大学の授業の課題としては適切もしくはむしろ少な目ではないかと考える。課題の量を減らすのではなく、どのようにすれば学生の意欲向上を促せるのか、そちらの方向にむけての模索を試みたい。

所属学科 文学部英文学科

氏名 教員④

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

どの授業も「復習しやすい授業」を念頭に授業を準備し、授業資料を作っているが、授業資料の作成に毎回時間がかかり負担となっていること、復習しやすい分、学生たちの予習が疎かになっているのでは、という懸念が常にある。そのため授業資料をより簡略化することを考えていたけれども、学生たちのアンケートコメントを読むとわかりやすい、学習意欲がわくという肯定的な意見が複数あったので、当分は続けたいと思う。

1 年次の学科必修科目 Morning English 1/2 は授業内容刷新のプロジェクトを立ち上げて Moodle 用の様々な学習課題を新規作成しているところなので、授業アンケートの際に学生たちに改善点を具体的に書いてもらうようお願いした。学生にとっての勉強しやすさを考慮して作業を進めてはいるが、やはり日常的に課題に取り組む学生たちの感覚を把握しきれていないことが今回のアンケートで分かった。また、改善すべき点だけでなく学習効果を実感してくれているコメントも多かったので励みになった。

2. 今後の具体的対応策など

Morning English については、Moodle 用の学習課題ですぐに解決できるものは秋学期の Morning English 2 ですでに改善を行なった。学生たちからも好意的な反応をもらっている。また、情報システム室のアドバイスを受けながら改善作業をしている部分もあるので、そちらは引き続き進めていく。現在は Moodle 用の学習課題の作り込みに時間をほぼ取られてしまっているが、それも今年度で完了予定なので、来年度以降は可能な範囲で個別フィードバックを行なうなど、よりインターアクティブな授業を目指し、アクティブ・ラーニングの要素が多く含まれた授業であることを学生たちが実感できる授業運営を目指したい。

所属学科 英文学科
氏名 教員⑥

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義 (Special Topics)、およびリーディング (Critical Reading) に関する授業評価を確認した。いつものことながら、Active Learning 的要素が不足しているとの評価を受けており、改善を心がけようと思うが、これはなかなか難しい。その他、改善を求められる点として、(1) リアクション・ペーパーの締め切りの設定が早い、(2) リアクション・ペーパーの採点の基準が不明瞭 (教員の中には基準があるが、それをとくに学生に伝えていなかった)、(3) 学期末レポートの草稿にコメントをつける際に、もっと具体的なコメントがほしい、等があった。

講義については、内容が良かったとのコメントがいくつかあり、励みになった。つぎの講義はサバティカル明けになるが、頑張りたいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

上記のとおり、リアクション・ペーパーの締め切りや、その評価基準について、改善の余地がありそうである。学期末レポートの草稿へのコメントは、可能なかぎり具体的な指導を心がけたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑦

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

毎年、演劇史を扱う授業の評価が低いため、改善を試みてはいるものの、1000年を超える歴史を包括的に扱うため、内容の取捨選択が難しく、まだ改善が必要だと再認識した。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目におけるディスカッションをより積極的に取り入れることが必要だと考えている。

所属学科 英文

氏名 教員⑧

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体としての評価は高く、授業の手ごたえを感じた。特に力を入れている課題へのフィードバック (Q3)、共同学習に基づくアクティブラーニング (Q4)、授業外での知識・技法活用 (Q5)、多様な見方の養成 (Q6)、批判的思考 (Q7) に対する科目平均が学科平均を上回っており、授業アンケートが機能していることも確認できた。

2. 今後の具体的対応策など

現状でも良質の学びを提供できていると思われるが、授業外学修 190 分には対応できておらず、内容と方法について改善しなければならない。また、授業内容のアップデートや教育 DX への対応なども行う必要を感じている。

所属学科 文学部英文学科
氏名 教員⑨

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ・いずれの科目についても、設問 4「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブ・ラーニングの機会があった」について、点数が低くなっている。
- ・和訳のスピードが速すぎる、早口すぎるという意見があった。
- ・授業内に回答時間を設けることのできなかった科目は、回答率の低さが顕著である。
- ・これまでの授業と比較し、全体として評価が高くなっている。

2. 今後の具体的対応策など

- ・大人数の講義科目でアクティブ・ラーニングの機会を設けるのは困難だが、中規模クラスではグループ・ディスカッションを取り入れ、大規模クラスでもリアクション・ペーパーへの応答時間を増やす等の工夫をしたい。
- ・とくに一方的なコミュニケーションになりがちな大規模クラスにおいては、講義のスピードを落とすよう気をつけたい。
- ・いずれの科目についても授業時間内に回答の時間を設けるよう工夫をしたい。
- ・アンケートによるフィードバックとそれに対する応答を数年間繰り返すことで、学生の満足度が上昇していることが分かる。この過程を今後も続けたい。

所属学科 英文学科
氏名 教員⑩

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

アンケート結果は全体的には学部科目平均値と比較して同じくらいか、それより少し高い評点のものが多かった。

設問別に見ると、「学習した内容が在学中もしくは卒業後にどのように応用されるかを学ぶ機会があった」が低い傾向があり、「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブ・ラーニングの機会があった」が高い傾向にあった。

科目別では、「Reading&Research」はほぼ全項目で平均値より高い評価になっているのに対し、「American Studies Seminar」は学生が知的に刺激を受けたか、到達目標が身についたかといった項目で平均値より低い結果が出ていた。後者のセミナーで学生の満足度があまり高くなかった原因としては、プレゼンといったゼミ形式の授業の運用があまり上手くできていない可能性もあるが、学生の反応を見た印象では、19 世紀の難解な文学作品テキストを扱い、また毎回の予習量もそれなりに多かったために学生がいまいち授業内容を咀嚼できていなかったことが原因かと考えられる。

2. 今後の具体的対応策など

前回のアンケートを受けて、当該学期はどの科目でもアクティブ・ラーニングの機会を少し増やすことで学生が主体的に考える機会を授業内で増やすようにしていたが、それはアンケート結果を見る限りでは良い結果として表れていたと思う。この点は今後も継続していきたい。

上で述べたようにセミナーの授業は講師の専門領域として歴史的な要素の強い 19 世紀のアメリカン・ルネサンス期の作品を扱っており、テキストが難解なためか、他の授業に比べると授業内での学生の反応が鈍かった。次年度は少し詳しく歴史的背景や作品の解釈を説明していく必要があるかと考えている。あるいは、少し短めの作品や、英語が易しめの作品を組み合わせたり、学生自身で文献等のリサーチをさせ発表させたりといった工夫をすることで対応していきたいと考えている。

所属学科 文・英文
氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

Special Topics in American Studies 1 は例年に比べて少人数であっただけに、受講生すべてに気を配りつつ授業がおこなえて、こちらの熱意も伝わり、また授業内容の浸透度も高かった。

一方、American Studies Seminar 1 においては、受講生が 13 人と比較的多く、また 2 限にもかかわらず遅刻者も異常に多く、集中力を保つのに苦勞したり、学生に注意を促したりしたためか、2 名の学生からは不満のあるコメントをされた。

a

2. 今後の具体的対応策など

American Studies Seminar 1 においてシラバス通りに進んでいないというコメントがあり、反省すべき点と自覚している。今後はシラバス作成の時点でより準備に時間をかけて取り組みたい。

所属学科 ドイツ文学科
氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

アンケートの参加者はごく一部だった。フィードバックは非常に偏ったものだった。ほとんどの回答は非常に肯定的だったが、非常に否定的な回答も2つあった。不合格だった2人の生徒が書いた可能性がある。平均的な数値のフィードバックもあったが、宿題の量がシラバスに対応していなかったという点だけを挙げていた。シラバスには1コマあたりたくさんの自習時間が設定されているが、そのままの課題量にしてしまうと学生が決してこなせないような高い仕事量を記入しなければならないため、学生がこなせる量の宿題を出した。そのため、宿題の量がシラバスに対応していなかったというフィードバックがあったと考えられる。

また、私はコースの1つを他の2人の先生と共有している。私のコースだけに当てはまるフィードバックはわからないため、詳細を把握するのが難しいと感じた。

2. 今後の具体的対応策など

コースで上手くいっていない学生に、彼らの業績になぜ私は不満を感じているのか、理由をうまく学生に説明する必要があると考えている。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員②

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

2024 年度春学期の担当科目においては特に選択必修科目「ドイツ語学研究」の運営に課題があったと思われる。50 名弱の 3～4 年次履修者は 2 年次までに習得したドイツ語力にかなりの差があり、ブラッシュアップを目指す学生、1～2 年次の総復習を望む学生が入り交じり、グループワークを組織するにも学生間のレベル差の調整が困難だったこともあり、学生同士が討議しながら学ぶ要素をあまり取り入れられなかったことがアンケート結果にも現れていると考えられる。

「文献演習」については、世界共通で現代人が日常的に抱える諸問題を取り扱う作品を題材としたことで、学生の関心にフィットさせることができたと考えられる。

2. 今後の具体的対応策など

3～4 年次対象の「ドイツ語学研究」においては、選択必修科目であるがために履修者数が 1～2 年次の語学科目の倍以上になった場合の運営方法について、事前準備も含めて再考する必要がある。従来以上に、履修者のドイツ語力のレベル差が開いてきていると感じられるため、さらなるブラッシュアップを目指す学生にも、1～2 年次の総復習を望む学生にも、建設的な学びとなるよう、一律の教材・内容とするのではなく、基本編、応用編などのカテゴリーを明示し、選択的に課題に取り組ませる方法も検討したい。

「文献演習」については、現代世界が抱える諸問題を扱う良質な作品を題材に選ぶとともに、作品に現れる問題について学生同士が討議できる機会を多く設けたい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

今回は、どの科目においても、基本的な授業スキルに関する評価は問題がない（4.0 を超える）ものの、共通して評価が低いのが、学生の主体性に関する領域で、自主的に授業のために費やす時間や、アクティブラーニングについての項目だったことから、あらためて授業内において、その点を具体的に示して見せる必要性を痛感した。

2. 今後の具体的対応策など

授業のなかで、予習や復習の具体的な箇所を指摘するのみならず、自主的に何をすることが求められるのか、あらためて「アクティブラーニングのためのポイント」を整理し、キーワード等を提示することにした。これに関しては、各自がそれぞれのやり方で調べるということにするが、しかしそのフィードバックも与えるために、Moodle などに、別途コーナーを設けてコメントを返す機会を設けた。この試みが次回の評価改善につながることを期待したい。

所属学科 文学部ドイツ文学科

氏名 教員④

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「文献演習 6a」はほとんど全ての回答項目で 4 点台後半を越えており、教員の努力が報われたようで嬉しく思っている。「本当に楽しい授業で、これが私がドイツ文学科に入った理由だとまでいってもいい授業でした」というコメントをもらい、教員冥利に尽きる。学生の主体的な発表を元に授業を進め、それに対して教員がコメントするという形が支持されていると考えられるので、今後もこの授業形式を維持していくようにしたい。

「ドイツ語 Ia」も概ね好評で、教員が丁寧に解説している点が評価されているようだ。ただし文法の授業はどうしても練習問題を解く時間が多くなり、単調になりがちなので少し変化を付けながら授業を進めていく必要があると思われる。

「ドイツ語 IIa」は思ったより評価が伸びなかったのが残念だった。今年度が初めての上智での授業であり、上智の独文 2 年生のドイツ語レベルを高く見積もったシラバスを立ててしまったため、少し授業の進め方がハイペースで、また毎回の宿題や小テストが多すぎたのかもしれない。来年度はこの点を改善するように努めたい。

2. 今後の具体的対応策など

「ドイツ語 Ia (文法)」は、どうしても文法の解説と練習問題を解く時間が多くなりがちだが、なるべく時間を見つけてゲームやさまざまなアクティビティを授業に導入することによって、学生が楽しくドイツ語を学べるように工夫したい。

「ドイツ語 Ia」と「ドイツ語 IIa」においては、語学以外にドイツの文化や社会について話したり、映像を見せたりする時間をもっと増やし、学生のドイツに対する興味を喚起するよう心がけたい。

「ドイツ語 IIa」は授業スピードを少し落とすようにし、また宿題や小テストがあまり学生の過重な負担にならないように注意したい。教科書（特に後半の課）の内容が少し高度であり、よく出来る学生の実力を伸ばすためには最適だと思われるが、あまり出来ない学生には難しいかもしれないので、教科書を変更することを考えてもいいかもしれない。毎回授業で使用しているパワーポイントのスライドは分かりやすいようなので、スライドを moodle にもアップすることによって、学生の復習を助けるよう配慮したい。

所属学科 文学部ドイツ文学科

氏名 教員⑤

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義科目における「説明のわかりやすさ」を問う Q1 の評価が低かったため、できるだけわかりやすい説明を心掛けたい。

「ドイツ文学入門1」に関しては、科目の性質上、Q4 の評価が低くなるのは仕方がないと考える。

Q5 については、少なくとも「学修した内容」がカリキュラム全体においてどのような位置づけについては説明したつもりであったが、やや低かったため、今後をもっと頻繁に説明を行っていききたい。

2. 今後の具体的対応策など

これまでもリアクションペーパーなどを通して、受講者の理解が不十分と思われる点をチェックし、講義前に配布するハンドアウトの作成の仕方、講義での説明の仕方を反省するきっかけとしてきたが、説明を十分に理解できなかった者がいないかどうかを講義中にも確認する何らかの手段を講じていきたい。

個々の科目の授業内容が、カリキュラム全体において占める位置づけを説明する機会を増やしていきたい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員⑥

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

Overall the statistics and students' comments seem to be quite positive. I think I can generally continue with teaching like I did in the past.

2. 今後の具体的対応策など

I notice that in the course ドイツ文化・思想史1 active learning is evaluated lower than average. Though this is a lecture with a large group of students, this is kind of difficult to accomplish. Nevertheless I will think about possibilities to improve this.

所属学科 フランス文学科

氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

グループワークやディスカッションを取り入れることについては、コロナ明け以降意識的に導入をはかり、授業全体との時間配分や取り入れるタイミングなどこちらも少し慣れてきたことを自覚しているが、その効果を実感することができた。

専門の基礎語学は必修で単位数が多いので、その成績についての学生の関心が特に高い。授業数も多いだけに担当する教員数も多くなる（ひとつのクラスを担当する教員が複数化する場合、ひとつの科目を少人数クラスに分割して開講するために担当教員が複数化する場合の両方がある）が、成績については合議で行っており、たいていの場合、素点を比べても教員間の評価にほとんど差が生じていない。ただ学生から見ると、点数がとりづらいと思う教員とそうでない教員がいることをアンケートを通じて感じた。

2. 今後の具体的対応策など

学科としても担当教員を半期ごとで交代するなどして、年度を通じて平均化するような配慮をしているが、この点については、ひとつの科目の担当教員の授業運営と採点の方法が全く同じことがベストとも言えないので、今後も検討課題としてゆきたい。

所属学科 フランス文学科
氏名 教員②

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

フランス語の授業については、学生にとって努力を要する内容であるにもかかわらず、熱心に取り組み、満足している学生が多いことがわかった。その他、文学理論を扱う科目についてはやや全体的に数字が落ち、内容を咀嚼できない学生が一定数存在することがわかる。

2. 今後の具体的対応策など

1年生の授業については授業内でアンケートを行い、ある程度の回答率を得ることができたが、他の科目については授業内で時間をとってでも解答してくれない学生もおり、授業の進度が遅れている場合は授業内で行えなかった科目もあった。今後回答率を上げていかないと真のアンケートにはならないことから工夫をしたいと考える。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員③

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

学生同士の議論、プレゼンテーションの機会が十分になかった、という指摘が多かった。フランス語の授業では難しい面もあるが、専門の授業では積極的に取り入れていきたい。

2. 今後の具体的対応策など

専門の授業で、テキストのある部分に問題を設定して、コメントしてもらうことは行っていたが、議論にまでは、至っていなかった。学生のコメントに対して、さらに別の学生にコメントしてもらうなど、工夫をしていきたい。

所属学科 French Literature
氏名 教員④

Desprez

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

The results of the survey reflects the level of the students. Most of the classes are more and more difficult to make.
The present aim of Sophia administration and consulting firm to reduce the number of full-time professor, to increase the number of student in classes appears through the results and the comments of the students as a complete stupid policy.
The only possibility at present to make things work is to have group of classes of relatively small size. One has to spend time to each student in order to get some result.

2. 今後の具体的対応策など

The only flaw in the result of the survey is to do more active learning. But the students being very passive, it is too much time consuming to be implemented.
The other idea is to foster the relations with outside activities.
Giving more home work again can be a direction to be explored.

所属学科 新聞学科

氏名 教員①

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

演習系の科目や、受講生が 40 名以下の科目に関しては、総じて満足度が高い結果となっている。「ジャーナリズムの現在 I」など、ジャーナリズムの現場のリアルな問題を扱う科目など、やや難しい内容を扱っているにもかかわらず、高い関心を持ってもらえたように思う。他方で、「人間行動とマスメディア I」のような多人数の受講し、かつ、理論系の科目については、アンケート、コメントを見る限り、主体的な学びとなった者の満足度が高い一方で、内容の理解よりも、出席や講義資料の獲得が目的化していると思われる回答が散見された。新聞学科の理論系科目に関しては、学期始めに他学科生が受講しに来るものの、途中で離脱する傾向も見られるが、今学期は、その大半が新聞学科生のこともあり、基礎的な内容は少なめにして、より専門的な内容を多めに講義に盛り込んだが、その満足度をコメントしている回答もあり、参考になった。

2. 今後の具体的対応策など

理論系科目に関しては、その資料の多くをパウボ等で提示しているが、板書の字が読みにくいというコメントについては、配慮の必要性を感じるもので、完全策を検討したい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員②

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

おおむね想定通りの結果であった。学生の傾向として、大教室の授業であっても、アクティブラーニングの多い授業への満足度はより高い傾向にあるようだ。アクティブラーニングについては、学生と教員とのやりとりに限定されず、学生同士の意見の共有、ディスカッション、他の学生の発言を聞くなどの実践も有効であることが結果から見受けられた。他方、アクティブラーニングの少ない科目については、満足度も下がる傾向にあることがわかった。

2. 今後の具体的対応策など

今年度、アクティブラーニングをあまり取り入れることができなかった科目については、来年度の授業において改善していきたい。

所属学科 文学部新聞学科

氏名 教員③

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体的に昨年よりも評価が改善する傾向が見られているが、授業時間外に費やした時間が少ない傾向が見られる。一部講義でトラブルもあったが、概ね予定通りに進めることができ、学生へのフィードバックもする機会を設けることができたことが評価に反映されていると思われる。授業時間外に費やした時間が少ない傾向が見られるのは、中間および期末レポートの時期以外はあまり課題を出さなかったことの反映だと思われる。

2. 今後の具体的対応策など

授業時間外に費やした時間が少ないため、講義の目標と課題の内容を見直し、特定の時期だけでなく普段から一定程度の課題に取り組む形を模索していきたい。また、主体性の評価が低い傾向も若干見られるため、より主体的に取り組める、問題意識を育める課題やワークショップなどを企画していきたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員④

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

新聞論 I の Q 9、時事問題研究 I の Q 13、演習 I（メディアリサーチ）の Q 2を除いて、おおむね学部科目平均値を上回ることができた（Q 4、Q 12は授業の評価を問う質問ではなく、数値の大小が評価と結びつかないため除外）。新聞論 I がシラバスの内容と食い違ったのは、その時々ニュースと結びつけた授業内容とすることで、学生の関心を高めるためであり、学生からは好評を得ている。

2. 今後の具体的対応策など

時事問題研究の授業については、グループワークが中心であるため、一部のサボり学生と真面目に取り組んだ学生の間で、成績評価に差をつけることが難しく、そのことに学生側の不満があるように見受けられる。秋学期には、各学生に対し、自分自身が作成したスライド資料や原稿、自分自身が収集した資料の提出を求め、成績評価に反映させることにした。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑤

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

概ね想定内の結果だと理解している。授業時間中にアンケートに回答させる時間を与えることができていないので、回答率が低いのが気になった。「外国ジャーナリズムⅡa」で内容が難しいというコメントもあるが、専門科目であり水準を下げるのは難しい。しっかり予習をしてもらわないと考えている。

2. 今後の具体的対応策など

次回はなるべく授業時間に回答させるように対応したい。予習を徹底させるため、パワポを事前に moodle に上げることを実験的に行っている。

所属学科 文学部 新聞学科

氏名 教員⑥

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

特にテレビセンターでの実践授業について、他の授業との兼ね合いで十分に時間に作業する時間が取れないという点を指摘する声がいくつかあったことはこうした授業を受ける学生のモチベーション維持につながる課題として受けとめました。

円滑な授業運営をするために授業の早い段階からテレビ番組制作するための「班分け」をしなければならない面があり、この種の授業を運営していく上でどうやって早い段階から実践に主体的に参加させて計画的に作業をさせることができるのかは難しい問題です。

実践の経験が乏しい個々の学生への個別指導にかなり注力して熱意をもって指導したつもりでしたが、学生からみれば「厳しすぎる」という受けとめ方が一部あったことは残念です。学生の気質が以前と比べて変わっている印象が強くなり、より懇切丁寧な指導が必要だと痛感しました。

2. 今後の具体的対応策など

今後は受講する学生たち全員が高いモチベーションを持って主体的なかたちで作業に取り組むものだという前提には立たず、まずはこうした実践授業が大学卒業後に社会生活を送る上で必要不可欠なものだということを丁寧に説明しながら授業を進めていきたいと思えます。

また、シラバスにもそうした説明を丁寧に記入した上で実践作業の「大切さ」「楽しさ」「面白さ」を実感してもらって学生たちのモチベーションを高めるような工夫を授業に取り入れたいと考えています。

所属学科 文学部新聞学科

氏名 教員⑦

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ・コミュニケーション論 I のパワーポイントのスライドは好評だった。改良を重ねた甲斐があり嬉しい。
- ・演習については、各評価項目にわたっておおむね平均を上回る評価を得ることができた。自由回答には「学生個人の関心と自主性重視の方針」が好評のようなので今後も続けたい。
- ・大規模科目では「アクティブラーニングの機会」という項目が低評価だった。基礎知識を学ぶ必修科目で知識授与型の一方的な授業になりがちなので工夫をしたい。

2. 今後の具体的対応策など

- ・大規模授業においては、授業冒頭で前回授業へのリアクションペーパー中の質問に対する解答解説を行ってシェアしていたが、加えて当日の授業内容に関するクイズを2～3問行い授業への興味と参加意識を高めたうえで講義に入る形を試してみたい。
- ・将来的には大規模授業における学生どうしの討論についても検討したい。e

所属学科 新聞学科
氏名 教員⑧

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「演習授業における課題の問いの提示について」

これまでは、授業の冒頭のガイダンスと学生の課題提示に対するフィードバックを行う際には、つまり最初と最後には明示的に課題の問いを全体に対して示してきたし、なるべく、途中の各段階でグランドクエスチョンへと繋がる問いを提示してきたが、学生によっては、課題の問いを、「当事者性をもった RQ」としては捉えられない場合があることを教えられた。より緻密にかつ体系的に、課題の問いをマイクロ-メゾ-マクロに、自在に、個々の学生の位置に関連付けて示せるようにする必要があると痛感させられた。

2. 今後の具体的対応策など

教員側が当然として抱える「問い」を学生はほとんど共有していない、ということを経験に銘じて、授業の進行段階の各プロセスにおいて、反復的かつ多様な形で、課題の問いに学生がアクセス可能なチャンネルを増やしていくしかない。

そのためには、自分の中で課題の「問い」を語る言葉の位相を、より重層化し、パラフレーズのヴァリエーションを増やしていく。特にアカデミックな文脈（理論枠組み）と世俗の文脈（実践的な施行）を自覚的に繋げて見せる必要もある。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑨

2024年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

いずれの科目もおおむね学部平均を超えていて、特段の問題はないと思われる。
講義科目である出版論 I については、内容への肯定的な意見が多いものの、アクティブラーニングに関する評価は低い。授業内でいわゆる学生同士のディスカッションは行っていないが、書店や図書館をおのおの見学してのレポートなどは課しており、「アクティブラーニング」の例としてあげられている例（設問）が限定的・誘導的ではないかという印象が常にある。
授業内に時間をとってアンケートを促しているが、初年次生以外は PC やスマホを開いても別のことをしているケースがある。
授業の形態を工夫している科目（メディアと文化IVa）は、ウェブ掲示板を併用してのディスカッションにできるだけ多くの時間を充てており（その点に関する評価は高い）、授業内でのアンケートをとる時間がない。

2. 今後の具体的対応策など

現状を踏まえて、レベルを維持するとともにアップデートを重ねたい。

所属学科 文学部新聞学科

氏名 教員⑩

2024 年度春学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

2024 年度春学期は、英語科目が多くあり、受講者のレベルもそれぞれ違っていました。必須科目の受講者もあり、卒業に加算されないけど、興味を持っている受講者がおられました。全体的に、個々の英語のレベルに合わせて受講者が自身でグループ分け、グループ内ディスカッション、意見交換、発表などを行いました。その中で、受講者の反応は異なる中で、授業で伝えたい、身に付けてほしい、知ってほしい、シラバスに記されている目標を目指す、などなどに対して、高いレベルで包括的な成果が見えてきたと思います。受講者の積極的に授業や課題にかかわっていたため、お互いのコミュニケーション、お互いのサポートが成り立ったような気がします。

新聞学科所属の受講者はもちろん、他学科の受講者も熱心に意欲的に応答してくれたので、個人的にやりがいがありました。

毎回の授業を準備する、記事をムードルに載せる、課題を読むとは、楽しいことでありながら、毎日の学びになり、学生の意見、立場、論争を受け、教員としての視点にも転回があり、学生と心を合わせて同じ課題、テーマをさまざまな観点から見ることができました。

2. 今後の具体的対応策など

- ⇒ 春学期に思ったほどできなかった、個人フィードバックを秋学期に行いたい。
- ⇒ 学生のレベルに合わせて記事を用意したい。
- ⇒ できる限り、電子メディアを使い、紙の印刷を減らしたいのです。
- ⇒ 学生たちのニーズに合わせた、テーマ、課題を検討する予定です。
- ⇒ 学科を超えて、新聞学科と他学科の学生が話し合える、意見交換ができる場、雰囲気をつくるのは、秋学期の一つの大きな目標です。